

# 東京鬼ごっこ

yuko



トンネルを二つまた一つと抜けるたび瀬戸内独特の柔らかな景色が広がっていく。車窓越しにキラキラひかる海を眺めていると、夢を持っていたあの頃に戻っていくようなそんな錯覚に陥る。

そつだつたらどんなにこいでたらう…

トンネルに入ると車窓に映るのはどんよりとした目を持った中年の冴えない男だ。

仕事だけが生きがいの仕事人間だつて？ いったい私の何がいけないのだ。

私は自分に問いかけてみた。すぐにまた穏やかな海が視界にひろがる…

別れて下さい

唐突に妻に言われた。二十五年連れ添った妻だ。

何を言ってるんだ

その日ひとり娘を新婚旅行に送り出した私は淋しさと満足感の混ざり合った酒のはいたぐいのみを口から離し妻を見た。

別れて欲しいんです

冗談かと思ったが、妻は両手をついて頭をさげている。

何をばかな事、くだらん事に付き合ってるいられるか

妻が頭を上げて私を見た。冷ややかな目だった。

今更何を言い出す、別れてほしいとどうするつもりだ

私は、自分の人生を送りたいんです

「自分の人生…？何が不満なんだ」

「私は私の生き方で歩いてみたくなっただけ、あなたの添え物ではなくて…。」

「生意気な…お前自分で歩くってことがどついつ事かわかっているのか！」

「あなたにとって私はいつも妻以外の何者でもなかった。私は私なの。あなたの妻で奈津子の母で…でもひとりの人間だわ」

「おかげかい…」

「そつね、仕事の事しか頭にない仕事人間のあなたにはわかりっこないわね」

私は言葉を失った。従順な妻だった。家事も育児もそつなくこなす。職場でも良妻で通った妻だった。

次の日妻は持てるだけの荷物を持って家を出た。

娘達が帰ってくる頃には戻ってくるだろうとたかをくくっていたが、一ヶ月たつても妻は姿をあらわさなかった。

娘には居所を知らせてあるらしく、娘夫婦はさほど心配する様子もなく新婚生活を送っている。

困るのは私だけだ。正直私は参っていた。

食事は外食でまかなえたが、身の回りの事がさつぱり要領を得ない。

洗濯は週に一度仕事帰りの娘がしてくれた。頭痛がして眠れない夜、「おい！薬」と思わず口に出してしまい、そついつ事のすつてが私を打ちのめして行く。

「お父さんって本当にお母さんの事なんにも解っていないかったのね」

洗濯物をたたみながら娘があきれた顔で言う。

「お母さんの焼き物の腕はみんなも認めているとつのだ…」

妻が陶器に凝っている事は知っていた。

妻が陶芸教室に通い始めた時、日曜日に一人でのんびり出来る事を内心喜んだものだ。

だが所詮はお遊びにすぎないと思っていたし、妻の陶器をまともに見た事などな

かった。

「お前、母さんの居場所知ってるんだろ？」

「ええ、もちろん知ってるわ」

「じゃあ、どうしてここに？」

「お父さん、私だって二人の離婚を言っている訳じゃないのよ。でもね、お母さんはもうお父さんと一緒にの人生ではなく、お母さんの人生を歩き始めているの。女として私は、お母さんの気持ちが良いと解るわ・・・」

娘にそう言われて内心私はあせった。

私は離婚など考えてもいなかったし、この年になって一人で暮らせるほど器用な男でもなかった。

折り返し仕事の方でも煮詰まってしまう、有望な若手が活躍する企業では定年予備軍の人間などリストラの対象ではない事を思い知らされた。

今までまったく消化していなかった年次休暇なるものを取る気になったのは上司の「君も少し休暇でもとってリフレッシュしたらどうかな」

の言葉に反発しての事だった。いらぬのなら辞めてやる・・・心のどこかにそんな思いもあった。

幼い頃良く皆と泳ぎにいった海岸・・・瀬戸内の島々は美しい。

あの町は自分を快く迎えてくれるのだろうか。二十年近く帰っていない町だ。

両親が相次いで亡くなった時、すでに東京での結婚生活に入っていた私は一人っ子である事をい事に両親の建てた家売り、まるで古着を脱ぎ捨てるようにこの町を捨てたのだ。

在来線に乗り換える。懐かしさと不安とが交互に私を揺すぶる。

駅に着いたらまず何処か旅館を探さなければ・・・

唯一今でも年賀状のやり取りをしている幼馴染には今日戻る事は知らせてあ

たが親戚といつても父方の叔母が住んでいるくらいで、そもやはり敷居が高かった。

景色は一面緑の山に変わりやがて少しも変わらない故郷の駅に着いた。

改札を出た所で「達夫！」と声を掛けられた。

「え・・・？」

「わじやあ！忘れたんか？」

「言一ちゃん？」

ガキ大将だった大隈喜一は少し太った人の良さそうな中年に様変わりしている。

「どうして？」

「今日達夫が帰ってくるいつて稔に聞いたけえ・・・みんな喜んで今夜は宴会じゃけん」

「みんな？」

「ほつよ、町におるもん皆楽しみにしとる。」こを出て行ったもんも盆暮には里帰りしてそのたびに集まってるが、お前ときたらまったくの音信不通じゃ・・・」

「そんな・・・もう忘れられてると思っただ」

「稔が夕方まで仕事の手があかんいつたで、急遽わしがお迎えにあがったちゅう訳よ！」

軽トラの横に大隈工務店とペイントされた車の助手席に乗り込んで、喜一の顔を見ていると鼻の奥がジンと痛くなる。人の心の温かさに触れた気がした。

「親戚の家に泊まるんか？」

「いや・・・旅館を探そうと・・・」

「ほつか、ほんなら丁度いい、今夜は晶子の所で宴会じゃけん、部屋をとりやええわ」

「晶子？」

「峰晶子じゃ、一級下の今は三日(ちゅう)旅館のおかみよ・・・」

喜一は携帯ですぐに連絡をとり部屋の予約を入れてくれた。

「ありがとっ、何かしら何までこんなにしてもらえるなんて思ってたよ」

私はみやげ一し持つてきていない自分を羞じた。

三矢は子供の頃私達が遊び場所としていた神社のすぐ近くにあり、木造のしっとりとした外観の旅館だった。

「ああー達夫さんーっ」

晶子は喜一に連れられて来た私を見るなり、懐かしそうに目を瞬いた。

「じっじゃっ晶子。達夫はちつとも変わってらんじやろっ」

「ほんまじゃねえ…私らが惚れとったままの達夫さんじゃわ」

喜一は笑いながら「この女達は皆達夫のファンだと説明した」

「わく、今から一軒仕事があるんで行くわ。達夫今夜は楽しみにしとれよ。懐かし顔が集まるから」

「ありがとっ、楽しみにしとるよ」

何の打算もなしに屈託のない笑顔で手を上げて喜一は車に乗った。

「みんな、うれしいのよ…出世頭の達夫さんが戻ってきてくれたんだもの」

部屋に案内しながら晶子が言った。

「そんなん、出世頭だなんて…」

東京の一流大学を出て、一流企業に入って、美人の奥さんを買って…」

胸がチクリと痛んだ。

荷物を置いたら少し外を歩いたらええわ。懐かしいでしょっ」

「清神社がすぐ隣りなんだね」

「よく遊んだものねえ、神社の境内で…」

大蛇退治で有名なスサノオノミコトを祭った神社は町民達の誇りだ。

毛利元就のゆかりの神社ですぐ近くに元就一族の墓もある。

旅館の名前の「三矢」も毛利元就の三矢の訓えからとったものだろう。

腰を掛けてポットしていると、子供の頃の自分が太い幹の木の陰からふいに飛び出して来るような不思議な気分に乗られる。

この町を出て四十年近くなるが、正直「こ」が懐かしいと感じた事はあまりなかった。

市内の進学校で有名な私立立高校に入学し寮生活を送っていた時も、「こ」に帰りたいと思ったことは一度もなかった。

それなのに今感じる「こ」の懐かしさはいつたし何だろう。父も母もいなくなっているといつ「こ」の町はこんなに優しい表情で私を迎えてくれている。

私の乾いた心のびび割れがきれいな水で少しづつ潤っていくようなそんな気持だ。旅館に戻ると晶子が冷たい麦茶を持って来てくれた。

「じっっ、神社の周りもちつとも変わってないでしょっ」

「うん。まるで小さい頃に帰ったような感じになったよ、昔のよつな祭りもあるのっ」

「ええ、五月に、子供歌舞伎も昔のままよ。少し前にテレビドラマで毛利元就をやったもんで、急にまたこのあたりに観光客が増え始めてね」

「ああ…大河ドラマ楽しみに見てたよ」

「あの元就の子供の頃をやった人、達夫さんに良く似てるって私ら奇ると話したもよ」

晶子は思い出したように笑った。

「もう少ししたら喜一さんも戻るし、声かけるからゆっくりしてっね」

「あの…誰が来るんだろっ、今夜」

「こ」に残ってる同級生達、もつとも私みたいに「一級下っつ」言っているけど、この辺で遊んだ仲間だから、達夫さんにも懐かしい顔ぶれよ」

しばらくして携帯が鳴った。

「達夫、かえってる？」

中川稔だ。

「稔？今旅館だよ」

「ああ喜一から聞いた。三矢に泊まるって？俺も今から行くわ」

「この町の昔の仲間が私の事を歓迎してくれるはずがない…そんな不安をどっしりでも消す事が出来ないうちは私は稔の声を聞いてよっやく少し落ち着いた」

「達夫さん みんな集まってるよ…」

晶子呼びに来た。

期待と不安で胸が痛くなる。

襖を開けると十数人の顔がいせいに私に向いた。

「だっちゃん……」

どの顔も穏やかに笑っている。

「久しぶりじゃねえ」

「元気にしてたんかい」

よく喧嘩した光男に小学校でクラス委員を一緒にやった友子…

ふたりで図書室に入り浸った健一。

よく見ると確かに懐かしい顔ばかりだ。

「久しぶりも…ごぶさたしてしまっつて…」

「ほんまにえらいごぶさたじゃー」

近況報告してもらわんにもあいけんね」

仕事の事、娘の結婚の事を簡単に話す。

「この不況で東京での生活は大変じゃるついで、まっつがなばつてるね。達夫の所は大

企業じゃけ、不況やら関係ないか…」

喜一がビールをつきながら言っつ。

「うちらあみたいいな下請けの下請けはそりやあもつ大変よ。この町じゃけえやつて

いけてるんよ、ありがたじつとじゃ」

稔が横から口をはさむ

「喜一ん所は奥さんがしつかりもんじゃからじゃる…達夫、喜一は真理ちゃんを嫁にもるつた事話したかいね」

「真理ちゃん？」

「ほつよ、三つ年下の可愛じ子があつたらつね」

「山根さんこの真理ちゃん？」

「そつそつ…達夫と俺で取り合つた、あの真理ちゃんをちゃっかり嫁さんにしたんじゃけえね。ほんまによつ出来た奥さんで」

喜一は笑いながら汗を拭いている。

「そついやあ、今日ラジオで昔の遊びの事話しとつたけど、懐かしい名前がでてきて昔みんなで遊んだ事思い出したよ、東京鬼ごっこ…覚えてるか」

「東京鬼ごっこが、一ごぶつ遊んだのよ」

「あの頃はなんでも東京つちゅつのがつみやあひカラじゃつたもん、鬼ごっこでも八イカラな鬼ごっこつ意味じゃつたんじゃるつね」

「東京鬼ごっこ…」

突然私の目の前を茶色のおかつば頭の少女が横切つた…

「えっ…うー…」

それは一瞬の出来事で瞬きの瞬間脳裏を横切つたと言つ方が正しいかもしれな

い、私は思わず頭を振つた。

「達夫さん、どつしたん、まさかこれくらいで酔つ払つたなんて事ないでしょつね」

晶子が覗き込む。

「大丈夫、最近あんまり飲む事がなかつたんで早く回りそつただけど…」

「酔つ払つたら、私らでちゃんと介抱してあげるけえ安心して飲みなさい、ねえ友



「ほんまよね・・・あら、達夫さん広島弁！」

自分でも不思議なくらい素直に自分の言葉で話せる。

思えばこの町を捨てた頃からこのあたりの言葉は極力話さないようにしていた。

方言を嫌っていた訳ではないがその方が自分らしいと思っていただけそれと同時に広

島弁に対してある種の恐れのようなものを感じていたのだ。

忘れた物を出してしまっただけそんな恐れだ。

「うっす、皆で写した写真があるわ、この辺の子供みんな撮ったの」

「写真さそっか、僕のカメラは一枚もないな」

晶子は少し古びた表紙のアルバムを大切そうに抱えてきた。

「あれ・・・いつだったか子供会のメンバーで遊園地に行った写真。その子、写ってるか

っ？」

この町にあった小さな遊園地。そっすえば何かと言えば子供達はこの遊園地集

まったものだ。大人が二、三人でも充分監視できる唯一の場所がここだった。

その写真には見覚えのある懐かしい顔が並んでいたが、あの少女はいないようだ。

「名前でもわかればねえ」

「あ、あ、あ、雲を掴むような話だよな。本当にいたのかどうかもわからない

っ・・・」

「うっす、いよいよ、また何か思い出したら言いつい」

窓辺に座って外の景色を見ていると心の刺が一つずつ取れて行く様なそんな気が

する。

自分が今まで一番必要だと思っていた事がさほど重要な事ではないと思えてく

る。

どうしても早く妻や子供を連れてここに戻ってこなかったのだらう。

時の流れが本当はこんなに緩やかでその中にいると人間は優しい気持ちに戻るの

だと気付かされる。

不意に妻の事が脳裏に浮かぶ。結婚して二十五年・・・自分は妻の事を真直ぐに

見つけた事があったらどうか。妻を一人の人間として認めた事があったらどうか。

娘の事にしてもそつだ、娘の何をわかっていたのだ。学校の事恋愛の事、すべて妻

に任せっぱなしだったじゃないか。

だが・・・と別の自分の声がする。自分は精一杯働いてきたのだ。妻子に不自由な

思いをさせたくないただそつ思っただけだった。それがいけないといつか・・・

「達夫さん、もし返屈してるのなら一緒にいかない？」

晶子は近くの窯元へ行くのだと言いつ。

「焼き物するの？」

「ええ・・・でもほんとに土いじりなんよ。土をさわると気持ちが落ち着くけん

ね」

「ぶっん、そんなもんかな」

「達夫さんもやってみたらええわ、嫌な事忘れるのにはいちばんよ」

窯元と言ってもセメントのいいロキヤビンで入口では一匹の「トギー」が尻尾を振って

迎えてくれる。シンプルな木製ボードには「安芸野」と書いてある。

中に入るとジーンズ姿の女性がろくろを回している所だ。長い髪を無造作に一つ

にまとめた一心に土に向かい合っただけ。

「先生こんにちは」

晶子に先生と呼ばれた女性は顔をあげ、あら・・・と一瞬私を見た。

「今日は友達を連れて来たの。土さわらせてあげてもいい？」

「うっす・・・お好きだけ土に触ればいいわ。ここでは何を作っても自由だか

ら」

晶子に促されて土をこねる。かなり力のいる作業だ。

私はいつしかその単純な作業にのめりこんで行った。

見よう見まねで一枚の皿を作った。繊細さはないが自分ではいい感じの中皿だ。

土の捏ね具合によって焼き物の出来もまったく違ってくると晶子は言った。力を込めて土を捏ねていた妻の姿を思い出す。

「こんな物の何がおもしろいのだ……いつもその音中に向かって思っていた。」

「不思議でしょう。なんでもない土の塊がいろいろな姿を変えるって……焼き物、やりませんか？」

先ほどの女性が「トト」を入れてくれ、私の皿を見ながら言った。

「うちには新宮香絵さん」のあたりでは有名な陶芸家なのよ。この人は私達の音のアイドルだった山村達夫さんね、先生なかなかいいセンスじゃない？このお皿」

「ええ、やっぱり男の人は力があるわ……焼くとまた感じが違ってもっと良くなるはずよ」

新宮……新宮さんって言われましたか？」

「はい」

「かな」

「達夫さん、新宮さんがどっかしたの？」

「香絵さんとおっしゃいましたよね。もしかしてお姉さんがいらっしやうならどこですか？」

「とせんと頭の中におかっぱの女の子の名前が浮かんだ」

「かな……そのための子は「じんべいかな」といつ名前だった」

「いえ、家は兄と私の二人兄弟ですが……」

「そっつですか」「ご親戚にかなさんと言われる人はいませんか？」

「かなさん……さあ、聞いたことありませんねえ」

少し晴れかけた霧がまた濃くなったようになもどかし思った。

「達夫さんの探している女の子は新宮と……名前なの？」

「ああ……じんべいかな……かなって呼んでた」

「この町の子に間違はないの？」

新宮香絵を紹介された時彼女の目になぜかその少女の眼差しを見たように似ている。

「すみません、突然失礼な事を……あの……これから焼き物の勉強をするのは遅すぎますか？」

「えっ……いえ、遅すぎるなんて事ありませんよ」

「そっよ、達夫さん、一緒にやりましょっつよ」

自分の気持ちをこんなに素直に口に出すなんて、本当に何年ぶりだろう少年のようなワフワフする思いと、すく目の前まで現れかけている

おかっぱ頭の少女を探し出したし、思いで私の胸は高鳴った。

「新宮かなさんね、誰か知らないか聞いてみるけん」

帰り道晶子が私を励ますように言った。

「まちがはなく実在してはいたはずなのに、どうして感覚えていないのかな……僕だけが幻を見ていたのだからっか？」

「こんな風に会っていたの？」

「こんな……って、僕が一人である時いつも何処からか……かなもいつも一人だったんだ」

「何だかミスアリーって感じ……ちょっと怖いけどすごく興味が湧いてきた。ねえ何か覚えたらん？家がどっかだったかとか」

「だめだ……思い出そうとするとかえって霧が濃くなってくる」

「そっつか、無理に思い出そうとしなはっつがええよ」

部屋に戻るとさっそく晶子が「焼き物入門」といつ本とやはり陶芸関係の本を何冊か持ってきてくれた。

「この間だけでなく、ずっと続けてね、きつと陶芸に出会って良かったと思えるから」

土をこねる感覚がまだ手の平に残っている。それは子供の頃泥をこねていくもの泥饅頭を作った時のかすかな思い出と重なりなつかしく柔らかな風を胸の中に吹き込んでくれる。

妻の気持が少しわかった気がした。

晶子が貸してくれた本には私とほとんど同年代の陶芸作家が紹介されていてそれぞれに個性ある作品を創り出している。

「じつじつ世界もあるんだ…素晴らしいと思った。自分も何か残してみたい仕事だけで終るのではななく、じつじつ形になる物を残したい。素直にそう思った。」

「新宮香絵さんの作品を使った店を香絵さんのお兄さんがやっているの。明日行って見ようか。」

私は晶子の優しさに感謝しながら頷いた。

翌日は曇りも曇も午後は時間が取れるからと、一緒に食事でもしようという事になった。

晶子が話したらしく「新宮かな」なる人物について二人とも少なからず興味を持っていた。

新宮香絵の兄がやっている店は「この町でも少し奥まった場所であり、梅と桜の時期をはずせばさほど人が集まらないのでは」と思えるような店だった。

しかも人通りのなまの上に言われないと素通りしてしまいうな佇まいだ。

「じつじつ」という名前だけが飾り気のない店の引き戸の横に立てかけてある。見客は寄せ付けないうと言いつつな雰囲気には少し後悔した。

こんな店は苦手だ…

晶子が先頭に立って引き戸を開ける。

「ようこそ。」

思いがけず明るい声が迎えてくれた。店の中は少し暗い心地よいトーンの照明

がテーブルとにあり内装もかなり落ち着いた雰囲気だ。先ほど感じた印象がまったく別のものになった。

私より少し若い店主は髪を一つに束ねてまるで侍のようだが人懐っこい笑顔が人柄を表しており、晶子や喜一達とも馴染みのようだ。

「史朗さん今日は大切なお客様をお連れしたから、うんと美味しいものをお願いね。」

「妹から聞きました。焼き物始められるそうですね。」

「あ…はじめてです。まだじつじつなる事が…よろしくお願いします。」

「達夫さん、じつじつはメニューがないの、その日取れた一番良い材料を使うので全部おまかせ。それでいい。」

「少くも張るお箸のときはじつじつお世話になります。」

「この町にはなご感じの店じゃからね。」

喜一も稔もこの店が気に入っているらしい。

店の隅に飾棚があって和食器が並んでいて。

「香絵さんの作品ですか？」

「はい。妹の作品を目当てのお客様も多かったです。」

ゆっくり寛いで下ささいと史朗は厨房に消え私達はしばし香絵の作品に見入った。

「じつじつで…新宮かなと言う女の子の事じゃが、あねはその…幽霊とかそういうのじゃないか？」

お茶を飲みながら喜一が言う。

「幽霊…まてか？」

私は笑ったが、稔も少し気味が悪そうに頷いている。

「誰に聞いても新宮かななんて名前の女の子知らんと言っている。」

「でも何か事情があって達夫さんの前にしか姿を表せなかったとか、じゃない

「それがおかしいと言いつた。幽霊でもなきやそんな事ではござん。」

「ちがうちがう、かなはちやんと普通の女の子じゃったよ。色皿でござい茶色がかつた皿の。」

「そつえば…香絵さんも、史朗さんも、同じ様な茶色っぽいの色よ。」

「やっほり新宮つて名前じゃから親戚かな。」

そんな事を話している内に史朗が料理を運んできた。

派手ではないが素朴な料理があまり主張をしない皿っぽく器に盛り付けている。

「これ、粉引…どんな料理にも合うのでござん。」

晶子が教えてくれる。

「粉引？」

「香絵の焼く粉引は女性らしい線とシンプルさがいいですね。」

「史朗さんは焼き物はしないですか？」

「やりませよ、僕は焼締が好きですわ、土本来の味が出るから。」

「あ、この筑前煮のお皿が焼締よ。」

「料理も全部一人で。」

「仕込みは妻も手伝いますが、お客様の数も限られているのでほとんど僕が作ります。」

「味は確かじゃ。」

「喜一はなつそく料理に善をつけている。」

「私達は器と見事に調和した料理の数々を堪能した。」

「どの味も素朴だがしっかり素材を活かしており、私は心から満足した。」

「器も販売されてるんですか？」

「時々お客様に頼まれて焼く事はありますよ。それに、気に入ったからどうしてとも言われると、断りきれなくて。」

「そつてござうね、僕みたいに全然詳しくない者でも、ほらこれなんか欲しいなと思つたら。」

私は刺身の盛りであった平皿を示して言つた。

「ああ、これは僕も好きな皿です。料理を盛る事で皿にも命が入るのか、使うほどに色になつてくるとは、」

なるほどなあ、どんなに高価な食器も使って初めてその役割をはたすんですね。」

史朗は嬉しそうに笑つて頷いた。

「史朗さん、じつはこの達夫は、新宮かな・なる人物を探しているんだけど、なにか心当たりはないじゃあつか？」

突然に喜一が言つた。

「かな・う、このあたりに新宮姓は家のほかには一軒ほどありますが、どちらも叔父夫婦の家で、かなさんと言つた人はいませぬ。その人がなにか？」

「いや、どうしてだか急に思い出して、でも名前以外なんにも思い出せない…とても大事な事を忘れてしまつていふような、そんな気がして気になつてしかたないんですよ。」

「いづくへらの人ですか？」

「だぶん、僕より二、三才下だと思つ。小学校一年かそのへんかな…その頃いつも一緒に遊んだのに、顔や洋服は覚えていないのに、いったいその子がどうしたのか、まったく思い出せないおかしな話なんだけど…」

「史朗さんには、そのお姉さんがいたとか…そんな事はないですよ。」

「稔が言いに、そつに聞く。」

「いや、そんな事は聞いてないなあ。でも…そつ言えは…」

「そつ言えは…」

「小さい頃誰かに遊んでもらつた、かすかな記憶が…いつだったか祖母に尋ねた事がありました。昔遊んでくれていたお姉さんは、どこにいったの？」

「誰の事言ってるんかっ。お前にはお姉さんはおらんっ。言いました。僕も深くは考えないでそれきりになりましたが」

「何だか、ますますミスリーめいて来たわね」

「叔父が何か知っているかもしれない・・・今度聞いてみます」

「私達は礼を言ひ店を出た。黙って車に乗り込んだ。少し肌寒い風が皆を無口にしていた。」

翌日から私は香絵のロフキヤビンに通い始めた。

土に触れていると何故か気持ちが落ち着いた。

夜になると仕事の事を思い出さないう訳ではなかった。一ヶ月の休暇届を出しているとはいえ休暇を終えて帰っても自分の居場所などなくなっているのではと不安も感じていた。

だが、たしえそつでもいい・・・自分には戻る場所があるんじゃないか。

此処でならもつと人間らしいゆつたりとした自分に戻るよつな気がする。

もう一度妻と、妻を理解しながら暮らして行けるのでは・・・そんな思いが広がっていた。

「達夫さん」

「あ・・・すみません。ぜんぜん気が付かなくて」

「ずいぶん熱心に作つてらっしゃるから」

「香絵は笑いながら覗き込んだ。」

「あら、いいですね」

「そついでしょつか。実はこんな感じのものを妻が作っていたもので・・・」

「奥様も焼き物をっ」

「ええ」

「素敵ね、ご夫婦で同じ趣味を持つ事が出来るなんて」

同じ趣味・と言われて私はとまどった。自分は妻の作品を何一つきちんと見てはいなかった。

それどころか焼き物にのめりこんで行く妻を半ば苦々しい思いで見送っていたではないか。

どつして歩み寄れなかったのだろつ。どつして妻の作品の一つ一つを素直に見つめてやれなかったのだろつ。後悔が胸を襲つた。

「そついえ、かなさん、どつて言いましたっけ、叔父に確かめて見ましたが・・・」

「叔父さんもわからなかつた」

「ええ。でも、ちょっと変なんです」

「変っ」

「かな、どつて名前を聞いた時の叔父は一瞬驚いた目で私を見たんですよ。すぐに知らなかつて言いましたけど・・・何か隠してるんじゃないかっ」

「かな、の存在は叔父さん達にとつて何か不都合な事なのでしょつかっ」

「家の両親でも生きていればもつと突っ込んで聞けたのでしょつかっ・・・」

「いいですよ、香絵さん。すみません、嫌な思いさせたのではないですかっ」

「そんな事はありません。それに・・・私も大いに気になってきました。もう少し調べてみたくなつちやっ」

「香絵は少女の様に笑った。」

「また一瞬おかつは頭の「かな」が脳裏を横切った。」

部屋に戻つて私はもう一度頭の中を整理した。

なぜ「かな」は少女のままの姿で私の頭の中にあられるのか・・・

なぜこの町の人々は「かな」の存在すら知らないのか・・・

答えは二つある。一つは「かな」そのものが単に私の空想の中の人物だったという事。

のままで姿を消してしまっている」といふ事だ。

最後に「かな」に会ったのはいつだったのだろう。私が思い出すようにすると頭の奥で何かもやもやしたものがあるのがそれを打ち消すように広がって行く。

「まだ考えているの？」

晶子がお茶を持ってやってきた。

「ああ、なんだかすっきりしなくて」

「みんな、それとなく探してくれているから、きっと何か情報が入るわよ。あんまり考え込まなくて」

「うう、だね・・・それから、一度家帰っていいかなと思ってるんだ」

此処にきて約一週間が経つようになってくる。家の事もまったく気にかからない訳ではなかった。

当初はほんの軽い気持ちで出かけたので着替えもそれほど持たないで来ていたし、正直れば故郷が居心地の良い所だとは思っていてもいなかったのだ。

「あ、うう・・・そうなの？でも、また戻ってくるんじゃないよ？今度は奥様も連れてくればええじゃない？」

私は思わず晶子に妻との事や仕事の事を話したい衝動にかられた。

「葉は・・・」

晶子はだまって聞いていたが、静かに言った。

「会わなきゃだめよ。一度会ってゆっくり話してらんなさい。素直になる事よ・・・」

そうかもいけない。今の自分なら素直な気持ちで妻と向き合えるかもわからない。妻の所へ行ってみるよ、仕事の事もゆっくり考えてみる。それから・・・またここに戻ってきいていいかな？」

「もちろんですよ、待っているから・・・」

「言、稔にも電話でひとまず帰って来る事を告げ、私はその日の内に列車に乗った。」

会社には一ヶ月の長期休暇を申し出た。何かあれば携帯に電話があるだろうと思っていたが、一週間の間誰からも連絡一つなかった。

「この事で私は自分の居場所の不確かさを思い知った。自分がいなければ困る事があるのではないかとひたすら休みも取らずに働いてきた。何より仕事を優先にしてきた。だがそれは自分の思い上がりで過ぎなかったのだ。」

自分一人いなくてもそれは会社組織にとってなら影響などない。休暇明けに帰ってみると自分の席が無くなっていて、なごうと事柄が笑い話ではなく存在するよつと思えた。

娘に電話をしてみる。

「あら、お父さん？いつだったの？島は」

「ああ・・・何か変わった事はなかったか？」

「うう、もつとゆっくりに来るのかと思ってたわ」

娘にとつても、ましてや妻にとつては私と同じ存在なのかもしれない。ほんの質問などないといふ事なのだろう。私が一週間ほど家にいなくても誰も困らないうい、何の問題も無い。

私は激しい疎外感に襲われた。

「母さんの居場所を教えてくださいませんか？」

「えっ・・・どうして？」

「どうしてって、このままじゃお父さんにはいかないたさう。でも、ちろんにしても一度話があったらいいんだ」

「そうね、じゃあ、お母さんから一度連絡してもらおうように話してみる」

リビングのソファに座って部屋を見渡した。

たった一週間空けただけなのに、その空気の冷たさに私は少し身震いした。

「この家を買った時、うれしそうに何度も夢みたいね……」と言っていた妻を思い出した。

結婚して二年がむしゃらに働いて誰よりも早く手に入れたマイホームだった。あの頃は自信に満ちていた……妻も子供も幸せなんだと思ひ込んでいた。

翌日まだ早いに妻からの電話があった。

淡々とした声だった。夕方なら時間があると言いつ。私は何度か行った事のある店の名を告げ待ち合わせる事にした。

久しぶりに会う妻は、まるで別人の様に生き生きとして見える。

髪を一つに束ね、まるでキャリアウーマンのように私の前の椅子に座った妻のその耳朶に小さな蒼い石のイヤリングを見た時、私はつろたえた。

今まで自にした事のなほ妻の顔を見た気がした。

「元氣そうだな」

「ええ」

「どうか、それならいい……」

「話して……」

「ああ……そうだな……お前の申し出を受けようと思つて……」

「瞬妻は驚いたような目をしたが、すぐにその目をさらせて、そう……」と言つた。

「あの家を出るよ、あそこはお前のものだ。不要なら売ればいいし誰かに貸してもいい。結局何もしてやれなかったが……お前の好きなようにすればいい」

妻に会うまで私は頭の中でいろいろな言葉を用意していた。もう一度やり直せなにか？最終的にはそう懇願するつもりだった。素直に自分の非は認めただ上で離婚を考え直して欲しいと言つつもりだった。

だが、あの耳朶のイヤリングを見た瞬間、用意もしていなかったこの言葉が口をつ

いて出た。そして、それは嘘ではなかった。話しながら私は私の中で一つの決意を固めて行った。

「家を出るって……なぜ？……私は家なんていらないわ。何にもいらない」

「いらなければ売ろう、早紀達に譲ってもいい。もう私には必要のないものだ」

実際に家族がいてその家なんだと身に沁みて感じていた。

「そうやってまた、困らせるつもりなんですか」

私は驚いて妻を見た。そうではないんだ、そんなつもりではないんだ。言いたい言葉が上手く出てこない。

「仕事を辞めて広島に帰ろうと思つた……だから……」

「まさか……」

あなたにそんな事できるはずがない。妻の目がそう言っていた。

離婚届はいつでも用意してくれ、私は何物の整理が出来次第家を出るから」

それだけ言つて席を立った。当然の事だが妻は追つてもこない。一言の言葉もかけずは采ないだが、意外なほど私は冷静に自分のこれからに答えを出していた。

その足でまっすぐ会社に向かった。

「辞める……」

部長は驚いた目で私を見た。

「辞めてほしい……するつもりなんだ」

「田舎へ帰ろうと思つています」

「田舎……君の所はもう……両親共に……くなられてきたら……帰って何を……」

「やりたい事ができました。もう一度自分の夢を追いかけてくなりました」

「青臭い事を言つな。甘い事を……」

「私の後は田代君が……彼なら何の問題もなくやって行けます。休暇が終わり次第出社してきちんと引継ぎはさせていただきます」

部長の唾然とした顔に一礼して私は社を後にした。

「これは成り行きなんかじゃないんだ。私は自分に問いかけていた。

自分に出来る事はいったい何なんだ・・・やられた事なんかあるのか・・・

とにかく、もう一度自分の気持ちを整理したい。家に帰って着替えと何冊かの本を持ち、私は再び新幹線に乗った。

ほんの何日か前に見たものと同じ景色が車窓に広がっているが、あの時と今では海の色や山の緑が少しだけ違って見える。自分の中の何かが確実に違っているのを感じる。

まだ少し時間がある。いじやないが・・・ゆっくりと考えれば、自分一人食って行くのなほ何をしたいか。開き直るつもりではないが、守るものがなくなった男は弱くも強くもなれるものだ・・・私は苦笑した。

「三矢」に荷物を降ろし、喜一に連絡をとる。手短かに事の成り行きを話すと喜一はまるで自分の事のように私の「わかれ」を気にしてくれる。

「わ」の所がまっすぐ平くやっつければ、うちに来てもらつたじゃが・・・」

「あ、そんな迷惑はかけられんよ。仕事は何とか探すつもりだ。アルバイトでもなつてもすめよ。」

「お、そつじつなよ。わしもどこかに当ててみるわ。給料は保証できんが・・・」  
「ありがたう・・・迷惑かけね。」

晶子はいつまでも三矢にいいと言ってくれたが、小さなアパートを探すと言つと、知り合いの不動産屋に格安の良い物件がないか探す様手配してくれた。

私は今更ながらに人情と言つもののありがたさを痛感していた

「たつちゃん・・・その夜つとつとした私の耳元で誰かが囁いた。

「たつちゃん・・・遠ざかりかけていた意識が急速に後戻りして私は飛び起きた。

「誰なんだ？」

それは「しんべん」かなの声に違いないと確信しながら、私ははじめて「かな」の存在に恐怖のよつなものを感してゐる。

「いったい君は誰なんだ・・・」

眠れない夜を過ごした私は翌朝散歩がてら「女芸野」に立ち寄りしてみた。

あいがわらず元氣のいい「ナギー」が出迎えてくれ、ちよつと香絵が庭の花に水を遣つてゐる。

「あ、・・・どうしてや、ずいぶん早いんですね。」

「お、おついでに歩きます。散歩してたら足が回ってしまつて・・・実は「ちよつと」に住もつかと考えています。そつなつたら、初歩から焼き物を教えていただけませんか？」

「まあ、そつなつたですか。どつぞ感じられるままに土弄りなつて下さい。焼き物の楽しさを知る事が初めの一步。達夫さんはセンスありますもの。きつと良いものが出来るわ。」

私は「しんべん」を見つけたよつな気がした。今からでは遅すぎるかまわからなすが、すつと昔に忘れてしまったはずの夢をもう一度追いかけてみてほしいかな。そんな思いが広がり、少しづつ身体の中に力の様なものが湧いてくる感じだ。

「帰って来てね。」

三矢で「ナギー」を飲んでみると稔が顔を出した。

「うちへ帰って来るな、しんべん。」

「しんべん・・・そのつもりだ。」

「それがいい。仕事の事は何とかなるよ。少しのんびりすりゃあええよ。どうせ、今夜飲みに行かんわ？」

「あ、いいよ。稔さえ良ければ・・・」

「じゃあ、喜一にも声かけるわ。」

稔の気遣いも心に沁みる。

昔好きだった画家の展示会があると新聞の催し欄でみかけ、昼からは市内の美術館へ向かった。

もう何十年も行った事のなかった美術館はすっかり現代建物に様変わりしており、そのロビーから見下ろす隣りの縮景園の緑が美しい。

何年もこんな感情からは遠ざかった生活だった。自分が芸術や美術に関心があった事さえも日々の懐かだしさの中で忘れてしまっていたのだろうか。

一枚一枚ゆくりと時間をかけて鑑賞する、私は贅沢な時間を満喫した。

ついでに・と立ち寄りた小さなギャラリーでは新進陶芸家の個展が開かれており、その淡い色使いと斬新な形のアンパランスなどに私は目を奪われた。

しかも、普段使いになるような気負いのない温かさまで感じられる。作家のプロフィールを読むとさすがに私よりも十歳ほど年は若いやはり脱サラ組であることが見える。

何よりも目をみはつたのはティーカップ類の面白さだ。

形も色も今までにない個性的なものから、淡い花びらを散らした繊細なものまで実にさまざまなかップとソーサーが並んでいる。

それらを見ながら私は自分の中で一つの夢が確かなものとして徐々に形を現していくのを感じてた。

その夜、喜一と稔に妻の事を話した。

「一人になった妻が前よりもいきいきとした顔をしているのを見た途端、自分はいったい何をしてきたのだろう」と思ったんだ。今までやってきた事は何だったのだろうか。」

「うーん、わしの所なんかは、女房がおらんと成り立たない仕事じゃけえ…女房のためと言いつゆり…まあよつやってくれとると、がらにもないが、感謝してるんや。」

喜一が杯を口に運びながら言う。

「うちのモパート勤めで家計を助けてくれるからなあ、子供に金がかかっていた

時には本当に夫婦して目いっぱい働いたよ。今はヤレ女性大学じゃ、ヤレ何とかの講義じゃとかで、空いた時間には出歩いているようじゃが、それはそれでええ、思うところ。達夫は自分が自分が…と思いつきたんじゃないか。」

稔の言葉が身にしみる。

確かに私は自分はこんなに一生懸命働いている。自分が家族の面倒を見てやっているとして自分一人が家族の犠牲になったかの様な気持ちだ。

「女房であっても達夫の一部ではなくて、独立した人間じゃと認めることよ。認められた人間は自由な世界を持ったとしても、けつて箍がはずれた様な事はせん。女が…とかしよせん女房に…とか認めよつとせんから、手の届かん所へ行ってしまうんや。」

私は不意に泣きたい気分になった。

一流企業の第一線で働き、世界を相手に仕事をしている…と自負していた自分よりも田舎町で細々と食べて行くだけの仕事をしているこの一人の男の方が、何と大きい人間に見える事が。

自分が人間の心を持たない機械の様に思えてくる。だが、今まで休む事なくがむしゃらに走り続けた自分を否定する事はしなくなかった。

「笑わないでくれよ…今から焼き物を勉強しようと思つんだ。もう遅いかもわからんが、市内で陶芸家の展示を見て、どうしてもやってみたくなった。もちろん、仕事の事も考えている。図面を書く仕事が見えないか知り合いに頼んでみようと思つんだ。」

「え…陶芸か。いいじゃないか、ちつとも遅くはないと思つよ。」  
「焼き物はええよ…なんと言つても土はええ。それに、図面つたあどんな物を書くんね。」

「建物の設計もやるし、パーツも…何でもやるよ。」

「何とならぶわいの仕事の衣装の図面やらも書けるかね」

「あ、もつららせてもらえるものなら、何でも書くよ」

「何つが、じゃあわいにも手伝えるかもわからんほしたら達夫の第二の人生がこいじ始まるんやね」

「言一達には言わなかったが、もつら少年を取ったら自分で焼いたカップで美味い」「一丁を飲ませる店をやりたい」と思っていた。商売をやった事のない者が…そんな廿二事…と思われらるらう。当分の夢は自分の胸の中にしてしておく事に…それで徐々に新しい人生の設計図が出来つつあった。

「うん、は…」

と稔が思いついたように言う。

例の新宮かなの事じゃけど、酒屋の一郎…覚えとるか？あいつ、この前久じぶりに出合つて話したんやが、その子かどうかわからんが、達夫と女の子が話してゐるのを見た事がある、と言つた。何しろ三十五、六年も前の話じゃからほつきりとはせんが、その子がその頃では珍しい、真っ白な洋服を着つたので今でも何とこの覚えとるらうんや。」

「白く服？」

間違いない、かなは白く服を着ていた。後ろで蝶々結びのリボンがゆれてゐる…

白く服、入るだ。

「うん、見かけたんだらう」

それが…一郎が思いついたのは、家の社で作つてゐる「証」を見てゐる時、昭和の遊びを特集してたんやが、ほれ、前にも話に出た、東京鬼「こ」を懐かしいとこつ話になつた後じゃった」

東京鬼「こ」…」

「一郎がお前を見たのは、みんなで東京鬼「こ」をしる時じゃったんやないか、と言つたよ、たしちゃんも隠れてゐるはずなのに…どうしたんだらう…そつ

思つたよ」

「どうしてこつ事なんだ。」

東京鬼「こ」…懐かしいはずのこの遊びが私には何故か恐ろしいものと思える。何かがあったのだ。あの東京鬼「こ」の日、何かがかなり起こつたのだ。

やはり、「新宮かな」は実在していた。

「こつか、かなについては、一度新宮さんに聞きに行つてみようと思つた」

「こつじゃね、新宮さんじゃたら悪い人じゃないけえ、訳を話してみよう、稔もつなずく。」

そつそく翌日、「安芸野」へ行き香絵に訳を話し、香絵は快く叔父への連絡を取る事を承諾してくれた。

かなへの強い思いと少しの怖れが自分の中を交差する。

週末私は香絵と一緒に香絵の叔父の家を訪れた。

香絵の叔父、新宮宗次は穏やかな雰囲気の人で、二人をにこやかに迎えてくれた。

「こつじゃい、あなたが山村さんの所の…えらつ立派にならなつ」

開口一番に宗次は思ひがけない事を言った。

「家をご存知なのですか？」

「あなたのお父さんとは親しくさせてもらつていました。どちらかと言えは兄の方が深く…そつですな、親友と言つても良い付き合いをしてりましたな。」

父は代々の土地の人間なのだから、そついつた付き合いがあつても不思議はないはずなのだが、私は戸惑つた。

十五歳の時に「こ」を出て以来、父や母の若い頃の事はあつるか、亡くなるまでの両親の人生など親身に考えていかなかった気がする。戸惑いと共に猛烈な罪悪感に胸が痛くなる。

「そつですか…私は親不孝な息子で、両親もめきわてた事でしよつ」

「やいや、山村さんの自慢でしたよ、良く出来た息子じゃ」と

香絵の叔母真知子が紅茶を入れて来た。

「お持たせですが、達夫さんに頂いたケーキ頂戴しましたよ」

真知子にとても達夫は初対面ではなく、懐かしい存在であるようだ。

「私もこちらにおじゃました事がありましたでしようか？」

「そうですね、小学校にあがる頃だったかしら、何度か見えましたよ。お父様の影

「隠れるように恥ずかしがり屋さんだったはずけど」

「うん、その山村さんは本家の方は敷居が高いとか言ってる、兄と良く我が家で話し

ていられたなあ」

頭の中で過去の引き出しを開けようとするのだが、どうしても思い出せない。

「あ…かなさんは、かなさんも「ちんちん」」

宗次と真知子は驚きの目で顔を見合わせた。

「加奈を…覚えていらっやあのか」

驚きの目を私に向け宗次はつめくように言った。

真知子もつろたえたように香絵を見た。

「あ、私は大丈夫よ、叔父さんも叔母さんも知っている事は話してあげて。」

宗次は遠くを見るように話し始めた。

「あれはまだ、香絵の母親が嫁に来る前の事じゃったが…」

新宮宗治の話は概ね次のような事だった。

新宮家の長男に嫁取りの話が持ち上がった頃、じつはその長男宗一郎には愛した

人がいた。彼女は美津という名の新宮家の下働きの娘で、年はまだ十八か十九だ

たらしく

そして、当然の成り行きともいっように美津は宗一郎の子を身籠った。

それを知った宗一郎の両親は子供を墮ろすように美津に頼んだが、美津はがん

として受け付けない。月満ちて生まれたのが「加奈」である。

宗一郎は美津との結婚を両親に哀願したが、結局その願いは聞き入れられず、香絵の母である圭子との縁談がまとまりその年に結婚した。

圭子は事のすゝめを知り、その上で加奈を自分が育てても良いと申し出た。

「まったく義姉はよう出来た人じゃった。美津に暇を出すといっ両親を、自分の

産んだ子と離れて暮らすのは可哀想じゃからと説得して、ひとつ屋根の下で暮ら

したんじゃから」

加奈は宗一郎似の目を持った色の白い綺麗な子だったが、腺病質な子であったと

いっ。

「病氣勝ちでほんど家の中で遊ぶ子じゃった」

やがて史朗が生まれ、圭子は宗次の目で見える限り二人の子を分け隔てなく育て

ていたといっ。そんなある日、美津は突然松江に帰ると言って新宮の家を出た。

加奈は六歳になったばかりで、ちやうど小学校入学する年だった。

「美津を実の母だと加奈は知っていたのじゃあろつか、母親について行ってしまった

ついて行った？一緒に松江に行ったのですか？」

「多分美津が無理やり連れて行ったのじゃあろ。まったく挨拶もろくにせずに

逃げるように出て行った。義姉には両手をつけて頭を下げたといっが、いつの間

に加奈を…と自分の間義姉は加奈を思っ泣いておったわ。義理とは言え我が子同

然に育てておったのじゃから当然じゃ」

「加奈さんは戸籍上はどっになつていたのですか？」

「それは、美津の子で兄が認知する形じゃなかつたかな、古い事でわしもよく覚え

ておらんが」

「じゃあ、加奈さんはその後美津さんの元で暮らしたのでしょうか」

「そっといっ事じゃな、きつう…」

「美津さんの居場所はわからないでしようか？」

宗次は何故？といっ目をしたが、ゆっくりと首を振った。

「ほづか、そんな事があったんか… 達夫が言った加奈は実際におったつちゅう事か」

喜一と稔は顔を見合わせて言った。

「でも、加奈の素性がわかって良かったじゃないか」

「つと…」

だがどうして加奈は私の目の前に現れるのか、

私は何となく釈然としない思いではるか遠くの加奈の姿を頭に描いた。

あの時、白いワンピース姿の加奈は私に別れを言いに来たのが。

それからの一ヶ月間は仕事の引継ぎや家の整理に追われた。

東京の自宅には、そのまま娘夫婦が住む事に決まった。

晶子が探してくれた部屋はアパートと言ってもメソネットタイプの、まだ新しい内装もしゃれた部屋だった。家賃も驚く程安い。

最小限の荷物を東京から送り、私の新しい人生がはじまった。

会社の同僚で先に退職をした知人から、わざわざだが仕事も回してもらえぬ事になった。

少ない荷物や家具を入れベッドをおけばかなり狭い部屋だが、これだけは・と持つてきた使い慣れた「デスク」に座ると、さあ、やるぞ。といつ気持ちが湧いてくる。

仕事の傍ら、週に一回「安芸野」に通う。充実した日が続いた。

「コトヒ」店を開くとしたら、どんなカップを作ろうか、ふと思いついて陶芸家をネット検索してみた。若い新進作家や名の通った重鎮な陶芸家までいろいろな名前が並び、見慣れた名前のサイトがあった。「山村由梨子の工房「南風」」

妻の名前だ。まるで懐かしい恋人に再会したような、ほろ苦い思いでアクセスして

みる。

全体的に淡いパステル色が基調のそのホームページには、妻の略歴、作品、そしてネット販売のショップまである。工房で作品を作っている妻の横顔の写真是、自分の見知らない人のよつでもある。あくまでも穏やかで温かい優しい笑顔はずっと昔一緒になった頃自分もつとも好んだ妻の笑顔のはずなのに。

作品を一つずつクリックしてみる。白を基調としたカップ類に彼女らしい繊細な可憐な花の絵が描かれている。どの食器も若い女性が好むであるつ、やさしい色合いと柔らかな線で見るものを癒す。

ショップでは限定ではあるが手頃な価格でのネット販売を行っている。

「コトヒ」カップ一揃いと普段使いのマグカップ、そして小さな猫の人形を購入した。

「コトヒ」カップとマグカップは季節の花が控えめに描かれており、上品な色合いと形が気に入った。猫の置物は娘が家を出る時持っていたものと同じものだ。あれは妻の作品だったのか、今更ながらに何もわかっていない自分に気づかせられる。注文しながら、これを妻が知ったらどんなに驚くだろう、私は自嘲的に思った。